

コンケン大学での居候生活 (24)

伊藤信孝

コンケン大学客員教授・工学部

国際交流プログラムに関し、最近あまりにも耳を疑う話を耳にした。驚きが冷めないうちに記憶にとどめておく意味で早々に此処に紹介報告する。したがって本報における主要内容は「国際交流事業」であり、筆者なりの意見を披露する。

驚きの話というのは次ぎのようである。長引くコロナ禍もようやくワクチン開発と接種などが徐々に整いつつあり、何とか先に一筋の光明が見えてきた感じであるが、地域、国によってその状況は未だ予断を許さない環境にある。オリパラ（オリンピック、パラリンピック）開催も間近に迫りつつあるが、最終決断へのためらいを強調する人も少なくはない。しかし、いずれ近い将来コロナ禍は克服されると言う期待を考えると、コロナ禍後の再活動への準備、計画を用意しておくのは当然で、人々の共通の認識である。大学においても1年半に及ぶ渡航自粛、ロックダウン、自宅待機、オンライン会議、などの窮屈な生活からの解放を見据えて、それなりの準備を整える時期に来ている。そうした中で、耳を疑う話を聞いた。それは「学生交流において何某かの規則を作る必要がある」という話しが持ち上がっているそうである。筆者が耳を疑うのはこの表現についてである。ではコロナ禍以前の交流事業は如何様であったのかと言う疑問である。ひょっとすると、交流事業において、決まった規則がなかったのではないかとさえ思えるのである。筆者の長い経験から顧みても、筆者自身はその様な交流事業を企画・実施した記憶は無いので極めて大きな違和感を感じた次第である。しかし、この言葉を聞いて、筆者が関わった同種のいくつかの事業について、長年の経験からあらためて回顧してみた。そう言われれば、筆者自身が企画した事業を除き、資金的支援をした事業の中には、その類いの事業が無い事も無いことが判明した。

それらの一部は既に本「会員の活動シリーズ」にも書いたと記憶するが、詰まるところ、学生の交流事業を企画する（大学、教員側）が「教育プログラム」と認識して居ない、と言う所に集約される。海外を見せてやりたいという、強い教員としての意思が働くあまり、それに必要な資金を準備し、送り出すことにのみ論点が集中し、その他の事には余りというか、全く考慮されていないかに見える事業があった。

筆者の持論であるが、セミナーやシンポ、ワークショップ、国際学会参加は確かに研究論文発表の場であり、特に院生にとっては国際学会での講演発表に加えて論文投稿という重要な役割もある。しかし、筆者はそうした学術的な活動に加えて、上記のイベントへの参加は国際感覚、常識、エチケット、マナー、協調性、責任感を学び、身につける機会でもあると認識、強調してきた。国籍の異なる学生の集合体が一堂に会して、会期中のプログラムを通じてフェイス・ツー・フェイスで触れあうことで相互友好、相互

理解を深め、次世代を共に生きるヒューマン・ネットワークを作る所に大きな意義がある。学術論文だけを重視するのであれば、いつでも論文を書いて関係の国際学術誌に投稿すれば良い。学生達に海外を見せたい、見せてやりたいと言う強い情熱のあまり、ただ単に必要経費に見合う予算を用意し、送り出せば良いというだけでは事業を行う意味はない。これまでも同様のことを書いたが、予算を用意し、事業参加の機会を与えても、参加学生自身が負うべき義務などについて周知しておかないから、何時も一方通行で、帰国してからも報告も、報告書提出もなしと言う事業があるのを思い出す。事業参加後に自国に帰国していても報告も連絡もない。何をしてきたのか誰も知らない。筆者が個人的に用意した1週間ほどのサマー・セミナー（スクール）へ引率、参加の機会を与えても、参加したと言う気持ちは見えるが、それが何を目的としたものかを見分ける必要がある。選考委員としての教員が募集をアナウンスし、公平に見える形で応募者を選考しても、帰国後の果たすべき義務、すなわち報告、報告書の提出などが義務づけられていないと、参加したと言うだけで高価はおろか、全く意味がない結果に終わる。

やはり事業の立ち上げ、企画、実施においては次の事項において明確、透明性がなければならない。

- 1) 事業企画の趣旨と位置づけ、必要性、事業目的の明確化
- 2) 参加資格、応募対象者の範囲
- 3) 選考基準、選考方法
- 4) 参加前、参加時、参加後の参加者の負うべき、あるいは果たすべき義務
- 5) 公的評価
- 6) 公的参加証明書の発行、単位認定と公式記録への記載

筆者が経験した例の一つは、支援または助成した対象学生が、そうした認識を共有せず、すでにプログラムを終えて帰国して居るというので連絡を取ると、「お部屋の方に訪ねましたが、見えませんでした」と言う小学生並みの言い訳である。逢えなければメモを残すなり、尋ねる前にアポイントをとるなど、方法はいくつでもある。こうした振る舞いを見ていると、「あまり助成、支援したくない」と多くの人が投資意欲を削がれるのは当然である。支援助成した側からすれば「お礼を言うことを催促している、感謝を強要している」と言う目で見られたくないから、極めて言いにくい。予め規則や規定を文書に記載して文書化しておく必要がある。大学生だから、もう大人だから、そこまで子供扱いしなくてもと言う安易な気持ちが教員・大学側にあるとまさに予算の無駄遣いになり、そのような事業は早晚消滅する。公的資金を使えばそれなりの義務を負うのは当然であり、そうした事を教え込むのが教育である。国際会議で他人が発表中に私語で話しあったり、スマホで話しをするのもそうした教育ができてないからである。開会式や閉会式にスーツやネクタイもせずショートパンツやスニーカーで出席する事を禁じていても、知ってか知らずかそうした恥ずかしい大学があるのも見てきた。教員の中には最近の国際学会ではネクタイをしなくても良い場合が多いなどと嘯いているが、教

員本人はそれでも良いが学生への教育という意味では間違っている。教員が注意し、自ら模範を示すのは今も昔も必要である。参加者が選考過程を経て決まれば結団式を、また無事に帰国したときには解団式を、そして大学によっては「ご苦労さん、良くやった」と言う参加学生の慰労と今後も頑張れと言う励ましの会を催すのも一案である。筆者と相棒（もう一人の事業立ち上げ者）は自宅に参加者全員を招いて、それを行ってきた。自慢げに言うのではないが、事業への思い入れと学生への情熱がわれわれをしてそうさせたことと認識、理解している。

国際交流担当の若手の責任者の中にはそうした配慮は持ち合わせず、帰国後ホテルで参加者が有志で集まって帰国後の夕食会を開催したことに「勝手な事をするな、責任者は俺だ、許可も得ずにやるとは何事か」と怒る意識の人間が重要な席に着いている大学もある。本来、担当責任者から参加学生に対して慰労、反省会、激励を兼ねてそうした慰労会を提案しても良いはずである。

晦日でも多忙な年末の12月30日でも当時の参加学生の多くは忘年会を兼ねて、拙宅を訪ね、集まり、思い出話に花を咲かせた。ある者は雑魚寝での宿泊し翌朝まで、宿泊が叶わぬ者は途中で中座と言う形で参加し、筆者が定年退職を3ヶ月後に控えた年末も多くが駆けつけてくれた。3大学国際交流事業を終えて帰国した翌朝は、早くから参加学生が、揃って筆者のオフィスを訪れ「有り難うございました」と深々と頭を下げる姿勢に感動を覚えたものである。これを筆者の自慢話と言う人も居るであろうが、それはそれで個人の自由、勝手である。そうかと思うと世話のしがいが無い不愉快な思い出もないわけではない。異なる学部の学部生が「留学したい」という事で訪ねてきた。資金はないので国際交流財団に応募申請して渡航費の交付を受けると言うことで、手続きに入った。相手大学の旧知の国際交流部長にお願いして、留学予定の相手大学から入学許可までも出してもらったが、あいにく使用されなかった。しかし応募学生からは、その後何の連絡も報告もなく時間が過ぎた。2、3ヶ月後に新たに留学希望者の面接試験に立ち会った。その時に、この学生が入っていた。言いたくはなかったが、教育的観点から「なぜ報告してこないんだ、社会の一般的常識は貴方の考えている振る舞いとは異なる。」と注意を促したが、その後どうなったかは知るよしもないが、異なる学部の学生とは言え恥ずかしい思いであった事を記憶している。思うにこの種の学生からすれば、留学して何をするかと言う確固たる目的や信念があるように見えない。ただ大学が金を支給してくれるのなら参加する（してやろう）というレベルのモチベーションしか持ち合わせていない。また、同じプログラムで参加した教育学部の学生（と言っても既に社会人で、年齢的には30才を少しこえたぐらいであったろうか、更なる単位修得のために在籍していた）2名は、プログラムの会期中、わざわざ「本当に良い機会を頂きました。大変良い勉強に成りました。有り難うございました」と頭を下げられ「心から喜んで貰えて本当に良かった」と感動を覚えたものである。閉会式が終わった後のフェアウェル・パーティーでは、学生達の間で涙、涙の別れを惜しむ姿が多く見られたが、そうした熱い思

いは最近の学生には殆ど見られない。やはりプログラム（事業の趣旨や目的、経緯、その後の展開）などが正確に参加学生に移転、理解されていないからと考える。企画側のやる気なさが反映して、消滅するプログラムはいくつかある。その殆どは企画側の事業への熱意の欠如、次世代人材育成への強い信念、心構えへの本気度が理解されぬまま、事務的に、またあまりにも事務化、恒例化して新規事業への取り組みの姿勢がおろそかにされているからと言うのが筆者の見方である。だから参加学生側もモチベーションが低い。事業の企画側も予算を確保し、活動実績を上げることに執着するから凋落への道を辿る。

責任あるポストに就けば、帰国後の夕食会の提案をするほどの配慮があっても良いはずである。個人的支出が必要なわけでもなく、然るべきポストにあれば公費でも支出は可能である。ある大学では既にそうした夕食会に参加学生に対して帰国後に実施して居て「びっくりした」が、責任者が若手に代わってからそうした事が全く無くなった。国際交流に於ける経験、キャリア不足と責任者自身の人間性が悪い意味で外に表れた一例である。これまで実施して居た背景や経緯について、調べもせずポストについた途端に自分が責任者だ、俺が全てを牛耳ると言わんばかりの横柄な姿勢が事業のレベルを下げる。言うまでも無く、事業と同様に大学の評価も下がる。全てはそのポストに就いた者の細かなマインド、キャリア、経験量の総合力が管理運営の全体を決める。事業について勉強も相談もせず、「俺が、俺が、と我欲を顔に出し、事業の推進どころか推進を抑制する」方向に向かう。自分が全てを把握して居るかの如き誤解をして居る人が、そのポストにつくとこのような事になる。「何も知らぬ癖にでかい顔をするな」と言う噂が広まり、その人間のそのポストでの存在が反って障碍になる。しかし任命権者は、その様な人を任命した責任を問われたくないの、余り関わりたくない。だから当たり障りのない程度に距離を置いて一向に対応しない。そうすると何時までも改善されず時間だけが無駄に過ぎ、最終的に大学の評価を下げることになる。

しかしこれほど分かっていることが、未だいくらかの大学で行われていると言う実態は驚きである。あまりにも大学ランキングやビジュアライズされたデータ（可視化データ）での効果を急ぐ姿勢が、本来の「教育」から大学を遠く離しつつあると言うのが筆者の見方である。端的に言えば事業企画の目的が、予算獲得であり、如何に多くの事業を消化、遂行したかという数値的な量のみで質を問わない点に問題がある。しかし民主主義では基本的には多数決であり、そうした背景を知らぬ、あるいは関心を持たない多数派には理解をする気構えもない。